

## うめくさ-9

ブルックス先生とセイヨウタンポポ  
ならびにアラビス

セイヨウタンポポの帰化について、平山常太郎氏は「洋種たんぽぽ 札幌農学校（大学）創立当時の教師ブルックス氏北米より蔬菜用として種子を取寄せ栽培せしが脱出野生化せるもの、六月頃同農大の校庭の廣々として牧草青々として燃へんとする間に黄花の盛んに咲けるは美観なり。（日本に於ける帰化植物：洛陽堂，1918）」と記している。平山氏は同書の緒言に「・・・宮部博士の厚き指教に接するの榮を得た・・・」と書いているので、この話は札幌農学校の第2期生で、農学担当のブルックス（William Pen Brooks）先生から直接学んだ宮部金吾博士から聞いたものかもしれない。宮部先生はブルックス先生について、「入学当時のこれ等の先生は殆どマサチューセッツ州立農学校卒業の新進鋭の士であった。当時はいずれも独身で、ピューリタン高祖父の開拓精神が身の内になほ燃えてゐて、後年墮落せる享樂的な一部のヤンキーとは全く趣を異にしてゐた。・・・ブルックス先生はアマストに帰り母校の教授となり、その就任中独逸に遊学、PH.D.の学位をとり、更にアマスト州立農事試験場の場長となり、ドクトル・オブ・アグリカルチュアの学位を得た。（宮部金吾：宮部金吾博士記念出版刊行会，1953）」と紹介されているが、セイヨウタンポポ持ち込みには触れていない。

「雑草学：半澤 洵，1910」では、扉に「東北帝国大学農科大学（札幌農学校の後身）内 たんぽぽ叢生の状」で2枚の写真を載せ（写真-1），

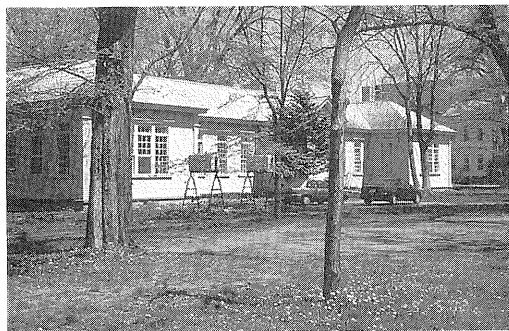


写真-1 「雑草学（半澤洵）」の扉、「東北帝国大学農科大学内 たんぽぽ叢生の状」の「上図 開花時期」の写真撮影地辺りの現状

「第三節 雑草の由来 第二項 雑草は作物より由来す」において、「なみたんぽぽ，せいやうたんぽぽ」を図示した上で「・・・食用蒲公英の如きも，其嫩葉は調理して食膳に上ぼすに足るものなるも，其の種子は冠毛を有するによりて・・・，然れども其の起源を尋ねれば，實に一米人が蔬菜用として，故国より輸入せるものに過ぎずとか。」と記している。こちらは，「一米人」がブルックス先生であったかどうかまでは言及していない。

ブルックス先生は明治10（1877）年3月から11年余にわたって札幌農学校の教壇に立ち，着任早々にアメリカに帰国したW. S. クラーク博士宛に農作物種子や農機具の購入を依頼したのをはじめ，何回かアメリカからの購入を行い，それらの文書は記録として残されている（北大百年史 札幌農学校史料（一），1981）。明治17（1884）年10月にアメリカの3つの会社あてに出した注文書の一つ，James J. H. Gregory社あての「札幌農学校ノ為メ価格拾弗二相当致候様左ノ穀菜種子標本御送附相成度候」で始まる手紙に，「・・・胡瓜。蒲公英。茄子。菊蒿苣。・・・」とあるのがセイヨウタンポポに関する記録である（五五八 農学授業用農具肥料等購入の件）。これにより，「ブルックス先生がセイヨウタンポポの種子を取り寄せた」ことは確かなようである。これ以前に，農学校当局や開拓使を通さずに私的な手段で取り寄せた可能性もないわけではないが，当時，私的な輸入はそう簡単ではなかったろう。

ただし，函館を中心に植物の研究をされた宗像英雄氏は，「・・・従って皆さんが摘草をされるタンポポの大半はこの帰化植物であるセイヨウタンポポの方だと思います。これは明治の初期，札幌農学校に招聘された米人教師達がサラダ用として携行したものが今日の状態に旺盛な繁殖をとげたものであるといわれております。（函館附近の帰化植物について，昭和28年9月19日，函館郷土史研究会 函館植物研究会 講演集，市立函館図書館，1956）」と，私的な持ち込み説を紹介している。

もちろん，セイヨウタンポポの輸入はブルッ

クス先生の経路だけだったわけではない。東京芝区三田四国町にあった大日本農会三田育種場の「明治十八年新舶来外産種子定価表(1885)」には、「たんぽぽ 佛 ピッサンリー 英名ダンデリオン 二銭(一袋) 拾銭(一オンス) 壹圓(磅)」とあるので、広く市販されていたことがわかる。

牧野富太郎博士が「札幌ニ在テハ*Taraxacum officinale* Web. ノ欧品大ニ路傍ニ繁殖セリト聞ケリ、(植物学雑誌18)」と記したのは、ブルックス先生の購入から20年後の1904年のことである。

話は変わって、1877(明治10)年3月2日に、北海道開拓使の札幌本庁でブルックス先生の着任歓迎パーティーが開催され、開拓使外事課が渡辺金次郎コックに作らせたという献立表が文書として残っている。北海道庁の鈴江英一氏は、記載された料理の材料を調べて特定したが、「サンヒレニョ」と「アラビス」が分からず「ご存じの方があれば教えていただきたい」と書いた(北海道行政資料課:赤れんが 22, 1972)。北農会の堀口逸雄氏はこの謎解きに挑み、「サンヒール(Samphire)は南ヨーロッパの海岸地方で岩の割れ目などにみられるセリ科の植物、ピクルスの原料になるという。また、アラビス(*Arabis*)属の植物には多くの種類があって、ヨーロッパ、北アメリカ、北部アジアに広く分布している。日本にも『はたざお』の名で自生し、山菜の一つになっている。しかし、これらはフォーマルな晩餐会向きのものとは思われない。」として、「シャンピニオン(マッシュルーム)ーサンヒレニョではどうであろう。また、オリーブ=オリブス=アラビスの可能性もまんざらではあるまい。」との結論に達した(アラビスとサンヒレニョ:道友 1976.11.20, 百年前の晩餐会:小さな随筆誌 紅109, 1977, 表-1)。

「サンヒレニョ」を「シャンピニオン」に充てたのはおそらく正解で、毛筆で書かれた「ン」を鈴江氏が「レ」と誤読したと思われる。「サンヒンニョ」が原型であろう。

「アラビス」は「*Arabis*」ではない、そんなにきちんとアルファベットに対応して記録されているはずがない、と思って明治期前期の作物の名前を書いたものを追っているうちに上記の「札幌農学校史料(一)」に「Beans, Early Bush.」とあるのに行き着いた。1877年10月に「農学校園監督ウイリヤム、ピ、ブルックス氏

ヨリ該園用洋牛器械小道具及ヒ種子肥料等元御雇教師ウイリヤム、エス、クラーク氏へ宛注文米国ヨリ購入ノ義申出」られたもので、その「購入物品目録」にある(二七〇 校園洋牛、道具、種子、肥料購入に付申入)。辞書(新英和大辞典 第五版, 研究社など)で「Bush bean」を引くと、「矮性のインゲンマメ、ツルナシインゲンマメ*Phaseolus vulgaris* var. *humilis*」となっている。「early」は「早生」のことである。「アラビス」は「アーリー・ブッシュ」を毛筆で記録したものと考ええる。第七の「ピンズ: いんげん豆」と同じか、類似の物である。

第八番目にある「コールサラダ」について、鈴江氏も堀口氏も解説を加えていないので、このままで意味が通るのかもしれないが、これは「コーンサラダ(Cornsalad)」, つまりノヂシャと思われる。「開拓使官園動植物種類簿 1873」の「澁谷壺番官園 蔬菜類」の中に「コオンサ

表-1 ブルックス先生歓迎晩餐会の献立

|    |                                                                                                                                                      |                                                                                                                                                      |
|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 第一 | チキン                                                                                                                                                  | 夕食拾三人前                                                                                                                                               |
| 第二 | ソフフ<br>タラ                                                                                                                                            | 御献立<br>白鳥                                                                                                                                            |
| 第三 | サカナ<br>トリ                                                                                                                                            | ロース<br>ビーンズ（いんげん豆）<br>イモ                                                                                                                             |
| 第四 | チャップ<br>（チャップ）<br>ヘトホア（グリー）<br>ピース<br>イモ（ジャガイモ）<br>シカ<br>デブロ（デブロマート）<br>サンビニョ（？）<br>イモ<br>カモノ<br>ニモノ<br>アラビス（？）<br>イモ<br>シカ<br>ロース<br>イマト（トマト）<br>イモ | 第八<br>ヘム（ハム）<br>コールサラダ<br>大菓子<br>アイチケレン（アイス<br>クリーム、フロンゲッキウ）<br>ラムゲキキ、ゼリ、ツヤミタ<br>ツ（ジャムタフイ）<br>小菓子<br>カヘー（コーヒ）、タバコ、バーン<br>酒、サンパン（ジャンペン）、ゼリ<br>ブドー、ビール |
| 第五 |                                                                                                                                                      |                                                                                                                                                      |
| 第六 |                                                                                                                                                      |                                                                                                                                                      |
| 第七 |                                                                                                                                                      |                                                                                                                                                      |

錦江英一 古文書あれこれ  
開拓使外事課の簿書から  
御雇教師ブルックスの着いた解込二付献立表  
「赤れんが」第二十一号、二九〇三頁、  
（一〇九号）より、（一）内は錦江氏の解釈

（堀口逸雄・百年前の晚餐会（紅）